The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	関係性の中で構築される専門性と権威性 ： 精神障害ピアサポーターのアイデンティティ構築
Author(s)	周, 氷竹
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 10-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102261
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

関係性の中で構築される専門性と権威性
―精神障害ピアサポーターのアイデンティティ構築[i]―

周　氷竹

1.　はじめに

本稿は、周（2024）における精神障害ピアサポーターのアイデンティティ構築に関する考察を継承し、それをさらに発展させることを目的とするものである。本稿および前稿はいずれも、共通する制度的背景および学術的文脈を共有している。すなわち、制度的にはピアサポートの導入が推進される中で、精神障害の当事者が「支援者」として支援現場に関与する機会が増加している点が挙げられる（相川 2013；厚生労働省 2021）。

しかし、当事者でありながら支援者でもあるピアサポーターの複雑な立場性は、制度的議論のみでは捉えきれず、個別の実践を通じた実証的な検討が求められる状況にある。そうした問題意識のもと、前稿（周 2024）では、2 名のピアサポーター（IM および KE）を対象としたインタビュー・ナラティブの分析を通じて、語り手の位置づけを示す「ポジショニング」および「声（モノローグ／ダイアローグ）」という概念を用い、語りにおけるアイデンティティ構築のプロセスと、そこに映し出される社会的規範を明らかにした。その結果、IM と KE はいずれも当事者と行政、当事者と非当事者のあいだを媒介する「仲介者」としての立場を、語りの中で構築していることが示された。

本稿ではこの知見を踏まえつつ、新たに SY というピアサポーターの語りに焦点を当てる。SY もまた、IM や KE と同様に地域で活動するピアサポーターであり、社会人入試を経て通信制大学の福祉学科に在籍しながら、複数の当事者団体に関与し、加えて障害者グループホームでスタッフとして勤務している。SY は、研究者、医療専門職、病院スタッフ、グループホームの管理者・利用者など、多様な他者と交差する立場にあり、その語りには複数の関係性の中で形成されるアイデンティティの動態が映し出されていると考えられる。本稿の目的は、SY の語りを通して、彼女が多様な他者との関係性においていかに自己を位置づけ、特に専門性や権威性をどのように構築しているかを明らかにすることにある。そのために、以下の 2 つのリサーチ・クエスチョン（RQ）を設定する。

RQ（1）SY はいかにして語りの中で自己を位置づけているのか。

RQ（2）SY はいかなる語りによって専門性や権威性を構築しているのか。

これらの問いに対する分析を通じて、制度上の「支援者」という役割と、実際の支援現場での語りにおけるアイデンティティ構築との間に存在する緊張関係を明らかにすることが、

本稿の最終的な目標である。

2. 先行研究の概観:ピアサポーターの立場性に関する研究

精神障害をもつ当事者が「支援者」として支援現場に関与するピアサポートの制度的導入は、2010 年代以降、政策的にも積極的に推進されてきた。相川（2013）は、精神障害者の地域移行をめぐる文脈において、ピアサポートが制度的に位置づけられるに至った過程を示しつつ、ピアサポーターによる「経験知」に基づいた支援の有効性が強調されていることを指摘している。

一方で、ピアサポーターの立場性、特に専門職との関係性における位置づけについては、依然として多くの課題が残されている。Vandewalle et al.（2016）は欧米の調査において、専門職の側にピアサポーターへの否定的な態度が根強く存在し、それがピアサポーターの役割遂行における障壁となっていることを明らかにした。日本においても、山川・船越（2020）は、専門職によるピアサポーターへの理解不足が、ピアサポーターにとっての困難の一因であることを示している。さらに竹内ら（2024）の調査では、ピアサポーターが感じる困難の一つとして、「自身の立ち位置が明確に定まらないこと」が挙げられており、インタビューの中では、「専門職と対等な仲間として扱われていないと感じる」「利用者や専門職との適切な距離感がつかめない」「専門職と比較して劣等感を抱く」といった声が聞かれた。こうした環境のもとで、ピアサポーターは「専門職と対等ではない自己」や「受動的な立場にある自己」といったアイデンティティを形成し、しばしば従属的な役割を受け入れざるを得ない状況に置かれていると考えられる。

3. 方法論

3.1 談話分析

談話（discourse）は、一般的には 1 つの発話や 1 つの文以上の「話し言葉もしくは書き言葉のまとまり（stretches of spoken or written language）」（Holmes&Wilson 岩田訳 2022:153）と理解されている。

談話分析は人がどのような言語を使って、どのような目的を達成するかを分析する方法である。談話分析の根底にある問いとして挙げられるのは、「言語がどのように使用されるのかに際し、どのような社会的要因、構造、規範が役割を果たしているのか、またその関係性はどのように作られたのか」、「使用される言語が、使用者の、他の参与者の、そして社会の成員たちの社会的アイデンティティにどのように関わっているのか」などである（Wardhaugn&Fuller 岩田訳 2022:155）。

社会言語学のアプローチは「社会と言語の結びつきをより微視的に見ていくことで、「社会」を捨象した言語理論のたんなる批判にとどまらない「方法」を手に入れるものである（嶋田・三上 2022:16-17）。

本稿では、当事者らの流動的なアイデンティティを捉えることが一つの狙いとなっている。いくつかのアイデンティティが交渉する様子を細密に描くには、言語的な特徴まで細かく分析する談話分析というアプローチが有効であると考えられる。

3.2 アイデンティティ（identity）とポジショニング（Positioning）

アイデンティティ（identity）という、人に関わる要素と言語のインターフェイスの考察は、言語と社会の直接的な結びつきを明るみに出すことができる（嶋田・三上 2022）。そのため、アイデンティティとナラティブが密接に関連していることは、談話分析に関する研究の前提となっているようである（Zimmerman（1998）、Georgakopoulou（2006）、De Fina and Georgakopoulou（2012）などを参照）。Georgakopoulou（2006）は Zimmerman（1998）[ii]のアイデンティティに対する捉え方を基に、「「大きな」アイデンティティ（相互行為の場を超え、外因的で「持ち運び可能な」（transportable）アイデンティティ）と、相互行為上の役割といった「小さな」アイデンティティ（語られる特定の場に固有の、内発的なアイデンティティ）にアイデンティティを分けている。さらに「大きな」アイデンティティを明らかにするためには、語りに内在された「小さな」アイデンティティを分析することが最善の方策であると論じている。本研究でも、語りにおける「小さな」アイデンティティ（位置づけ）を分析することで、より大きなアイデンティティの考察につなげることができるものと想定する。

ポジショニング（Positioning）は、アイデンティティと同様に社会的構築主義の立場に立つ概念であり、人々の語りの中で自己がどのように位置づけられるかを捉えるものである。ポジショニングは談話の流れの中で動的に形成されるものであり、アイデンティティとは固定された属性ではなく、多様な語りの実践を通じて構成され、文脈ごとに再構築されるものと捉えられている（Davies and Harré 1990）。このように、ポジショニングは、他者との関係性と状況に応じた語りの中で常に変化し続ける、可変的かつ関係的な存在である。

4. データについての説明

本研究で用いるデータは 2022 年 5 月に行われた 1 時間 41 分のインタビューの断片である。筆者は当事者団体 Y に依頼文を送り、団体のメンバーに回覧してもらい、協力が得られたメンバーSY に対して、インタビューを行った。インタビュアー（筆者、ZB）とインタビュイー（SY）の基礎情報は以下の表 1 の通りである。

表 1 インタビュー参加者の基礎情報

協力者	世代	職業	性別	エスニシティ	精神障害
ZB（筆者、インタビュアー）	20 代	大学院生	女性	中国	非当事者
SY（インタビュイー）	40 代	ピアサポーター、福祉専攻の大学生、自助グループ K の代表	女性	日本	双極性障害の当事者

できる限り自然な談話データを収集するため、半構造化インタビューを行った。インタビューにおいて、インタビュアーは予め用意した質問（ピアサポーターに関する経験、当事者団体での活動など）を適宜投げかけ、インタビュイーに語ってもらった。

また、倫理的な配慮を行った上で、調査に協力してもらうことについてインタビュイーの同意を得た。同時に、その調査の内容が精神障害に関するライフ・ストーリーについて聴きたい旨を明記したインフォームド・コンセントをとった。

5. データ分析

例 1 と例 2 は、インタビュー録音の 19:01～21:09 にかけて連続して語られた内容である。例 1 と例 2 では、地域活動支援センターの管理者、病院のスタッフ、グループホームの社長といった異なる立場の人物が登場し、各人物との間で展開されるスモール・ストーリーが描かれている。これらのスモール・ストーリーを通して、SY が自己のアイデンティティをどのように構築し、各人物との関係性をどのように形成したかが明らかになる。例 1 と例 2 は、SY の個別の経験を通じて、支援現場における関係性の多層性と、当事者を取り巻く群像を浮かび上がらせるものである。

例 1 ＜ピアは健常者に使われるんですよ＞

1. SY: え:とね 地域活動支援センターっていうところの管理[者ですね
2. ZB: [あ: なるほど
3. SY: そこの そこの管理者がピアのグループとか 仕切 [ってるから
4. ZB: [あ::
5. その管理者は 当事者ですか
6. SY : 違います 違います
7. ZB: なるほど（..）なるほど 勉強に h なりまし[た@@@
8. SY: [@@@
9. ほとんど専門職ですよ 健常者ですよ
10. 健常者に
11. ZB: はい
12. SY: ピアが使われてるんですよ
13. ずっとそういうのが続いてるから 歴史的にもずっとそうなんですよ

14.　　ピアは健常者に 結構使われるんですよ
15.　ZB: はい
16.　SY: 地域移行って言って 病棟訪問とかも私してたんですけど その時でも
17.　　あの病院のスタッフとかに
18.　　閉鎖病棟とか鍵開けてもらわないと[ダメじゃないですか
19.　ZB:　　［はい
20.　SY: 鍵開けてもらうのでも
21.　　ちょっと待ってて あんたら来たら忙しくなるわとか h[言われたり hh@@
22.　ZB:　　[ん
23.　SY: ほんまに対等に見てもらえへんっていうか そんなとことかもあるし
24.　　ちょっとつらい思いしますよ@@@ いやもう

例 1 の 1-15 行、16-24 行には、地域活動支援センターの管理者と病院のスタッフに関するスモール・ストーリーが挿入されている。これらについて順に分析する。

まず、3 行目では、SY が地域活動支援センターの管理者について「ピアサポーターのグループを支配している」と述べている。SY の言語使用に注目すると、「仕切る」（3）という権威的な表現を用いることで、管理者の権力の強さを表している。さらに、ZB が管理者が障害当事者であるかどうかを確認すると、SY は「違います違います」（6）と繰り返し否定し、9 行目で管理者が「専門職」（9）であり「健常者」（9）であると答えている。10-12 行目で、SY はピアサポーターが健常者に「使われ」ていると述べ、しかもその状態が過去から現在まで続いていると指摘している。「使われる」という動詞を通じて、SY はピアサポーターが受動的かつ物扱いされている存在であることを強調している。また、9 行目では SY が「専門職」と「健常者」をほぼ同義的に用いている点も注目に値する。以上を踏まえると、SY はこの語りを通じて「ピアサポーター・障害者」対「専門職・健常者」という対立的な構図を構築し、受動的な立場にある障害者としてのピアサポーターと、主導権を握る健常者としての専門職という関係性を明確にしている。

次に、16-24 行では、SY が過去にピアサポーターとして閉鎖病棟を訪問したエピソードを語っている。その際、病棟のスタッフに閉鎖病棟の鍵を開けてもらう必要があったが、SY はスタッフの「ちょっと待ってて あんたら来たら忙しくなるわ」(21) という言葉を引用し、歓迎されていない雰囲気を感じたことを語っている。「あんたら」という表現にも注目すべきで、これは SY 個人ではなく、ピアサポーターというグループ全体を指していると考えられる。つまり、個人としての SY ではなく、ピアサポーターという集団そのものが好まれていないことが示されている。このスタッフの言葉から、SY は病院スタッフがピアサポーターに対して嫌悪感を抱いているという普遍的な態度を読み取っている。また、23 行目で SY はピアサポーターと病院スタッフとの間に明確な権力差が存在し、対等な関係にはないこ

とを強調している。ここで、ピアサポーターが「嫌われ者」で部外者（outsider）としての立場に置かれていることが浮かび上がる。

例 1 の語りに続く例 2 では、グループホームの管理者に関するスモール・ストーリーが展開される。

例 2　＜立場が一緒やとか 同じ病気持ってるとか 絶対言うな＞
25.　ZB: SY さんはなんか　同時に当事者で　そして
26.　　グループホームで社員として働いてますね なんていうか
27.　　ちょっと一種のちょっと健常者の立場にな な [なっていますね
28.　SY:　　[ん:: なってますね
29.　　ん だから なんか あの
30.　　グループホームにいる利用者さんに対して
31.　　私は自分らが一緒やでっていうことを言いたいんだけど
32.　　それは絶対言わないでって言われて
33.　ZB: ん
34.　SY: あの:立場が一緒やとか 同じ病気持ってるとか 絶対言うなって[言われてて
35.　ZB:　　[誰　誰が
36.　SY: 管理者に しゃ 社長に言 hh われて グループホームの社長に言われてて
37.　　そうなったら　もう言うこと聞いてくれなくなるよって言われて
38.　ZB: なるほど
39.　SY: なめられるって言って
40.　ZB: なるほど

語りの冒頭で、SY は自身が現在グループホームの社員として障害当事者にサービスを提供していることを ZB に説明している。ZB が SY の立場が「健常者の立場」（27）に切り替わるのかを確認すると、SY は「ん:: なってますね ん」（28）と答え、グループホームの社員としての活動においてある程度健常者の立場に立つことを認めている。さらに、SY はグループホームの利用者を「利用者さん」（29）と呼ぶことで「サービス提供者」としての自己を前面に出しつつ、「自分らが一緒やで」（30）と述べて当事者性に基づく共感の土台を築きたい意図を示唆している。しかし、グループホームの管理者である社長からは「立場が一緒や」（33）、「同じ病気持ってる」（33）といった発言を禁じられている。その理由として、管理者は「そうなったら もう言うこと聞いてくれなくなる」（36）と述べ、SY が障害を開示すると権力差が失われ、相手から「なめられ」（38）見下されることになると考えている。この管理者の考え方から、SY に障害者であることを隠し、「健常者」として振る舞うことが求められていることがわかる。ここで、SY は障害者であることを隠しつつ、健常者として振る舞う自己を構築している。

例 1 と例 2 の分析をまとめると、SY は、受動的な立場にある障害者としてのピアサポー

ターである自己、「嫌われ者」で部外者としてのピアサポーターである自己、障害者であることを隠して「健常者」として振る舞う社員である自己といったアイデンティティを構築している。

インタビューが進行するにつれ、インタビュアーである研究者と、インタビュイーである研究協力者という立場が明確化され、それぞれの立場に応じた相互行為が展開されていく。例 3 は、そうしたやり取りの一場面（録音の 57:29-59:01）であり、SY がインタビュアーの ZB を前に、自身が抱く「研究者」という存在に対するイメージや見解を述べる語りである。

例 3「（先生たちは）なるほど っていう」

1. ZB：SY さん SY さん はやっぱり なんか 他の院生さん あるいは
2. 先生たちはそんなに健常者目線が（ ）と思いますか
3. SY：研究者の人って
4. ZB：はい
5. SY：なんか なんだろう 空気になりたがるというか
6. どっち(.) どっちでもないよ [ていう
7. ZB： [あ：:なるほど
8. SY：うちの味方でもないし どっち[でもない
9. ZB： [なぜそう思われますか けん 研究者たち
10. SY：なんかね あの: ん::: 話してると
11. ZB：ん
12. SY：すごく ん よく聞いてくれはるん
13. ZB：んん
14. SY：でもそれは違うよと思っても絶対言わへんし
15. ZB：ん
16. SY：それはそうだね ともあんまり h 言わないし
17. ZB：あ::
18. SY：どっちかといえば ん ん ん んって＝
19. ZB：＝お:::
20. SY：よく聞いてくれはる
21. ZB：なる[ほど そういうことか
22. SY： [なるほどね↑っていう
23. ZB：私もさっきなるほどって言って
24. SY：何も知らない状態で聞いてくれるから 一番助かるんです@@
25. 偏見とかないから
26. ZB: え↑ そう そういうのがいいと思います？
27. SY：知ったかぶりで ちょっと知ってるからって言って
28. そうだよね そうだよねっていう人と やっぱり 比べると
29. ZB：んん
30. SY：知らないふりしてくれる方が話しやすいっていうか
31. ZB：なるほど
32. SY：知ってても言わないっていうか
33. この人は違うんだろうなと思って聞いてくれてるから それがすごくありがたい

例 3 の語りに入る前に、SY は例 2 が示したように、職場であるグループホームの上司が健常者目線を持っていることに不満を漏らした。ZB はこの話の流れを受け、大学の他の学生や SY にインタビューした研究者や教員にも同様の健常者目線iiiを感じるかどうか尋ねた。この質問を受けて、「なんか なんだろう」（5）と応じたように、SY は自身が考える研究者像を具体的に説明するため適切な語彙を探している。その後、彼女は「空気になりたがる」（5）という表現を用いて描写し、さらに「どっち(.) どっちでもないよ」（6）と補足説明を加えた。「空気になる」とは、「空気のような存在、つまりいてもいなくても気にならないようになる、存在を意識しないようになる」と言う意味である。ここでは、SY は「空気になりたがる」（5）と言った途端、誤用に気づき、そのすぐ後で自ら修復を行い、「中立的な立場」であるという、本来自分が言いたかったことを説明していると考えられる。ここで特に注目すべきは「どっち」（6）という表現の使用である。「どっち」について、1 つの興味深い点が浮かび上がる。「どっち」は通常、二者択一の状況で用いられる。この表現は、ここで、2 つの異なる立場や視点の間での中立性や曖昧さを示唆しており、SY の認識における研究者の立ち位置を表現している。8 行目において、SY は「うちの味方でもない」と述べている。すなわち、研究者である人は必ずしも障害者と同じ側に立つわけではないことを示唆している。また、SY はここで明確に述べていないものの、「どっちでもない」（6）が示したように、研究者がいわゆる健常者集団にも属さないと SY が考えていることが明らかに読み取れる。

7 行目で、ZB は「あ : :なるほど」という表現を用いて、驚きを伴う新たな気付きを得た様子を表している。この反応が示したように、SY の発言内容は ZB にとって新しい知見であることが窺える。そして 9 行目で、ZB は SY にそう考える理由を尋ねている。

この質問に対し、SY は「すごく ん よく聞いてくれはるん」（12）と回答し、インタビューの過程で研究者が SY などの研究協力者の話を丁寧に傾聴することを表している。続いて、SY は「でもそれは違うよと思って 絶対言わへんし」（14）と補足し、研究者がたとえ考えが相手と一致しなくても、異論を表明しないことを説明している。さらに、SY の見解では、研究者は「それはそうだね」（16）と言いつつ、安易に相手の意見に同調したり、簡単に同意を示したりしないという。SY にとって、SY にとって心地よいのは、研究者が「ん ん ん ん」（18）や「なるほどね」（12）などのことばを発し、研究協力者の発言を評価せず、彼ら／彼女らが自由に話し続けられるように促すことである。この語りの特徴的な点は、SY が「でもそれは違うよ」（14）、「それはそうだね」（16）、「ん ん ん ん」（18）という 3 つの声を引用して、インタビュアーの傾聴する姿勢を表現していることである。これにより、これらの言葉を発する人物像が非常に生き生きと描かれている。

この発言を聞いた後、ZB は思慮深げに「なるほど そういうことか」（21）と述べる。続く SY の発言では、「なるほどね」（22）という形でこの言葉を引用し、SY が理想とする傾聴の際に使える表現の例として示している。ここでの SY の行動は、ZB の反応を認め、同意かつ承認を示す行為と解釈できる。

24 行目で、SY は「何も知らない状態で聞いてくれるから 一番助かるんです@@」（24）と述べ、評価を下さずにただ傾聴することが話し手にとっては役に立つとしている。ここで、SY は研究協力者としての立ち位置を前景化させ、理想とする研究者の傾聴姿勢について期待や助言を提示している。

ZB はこの発言を聞いて再び驚きを表し、これが本当に理想的な傾聴の姿勢だと思うかと尋ねる（「え↑ そう　そういうのがいいと思います？」（26）。この質問に対し、SY は前と同様に、インタビューで不快に感じる態度の例として、「そうだよね そうだよね」（28）という声を挙げ、非当事者が勝手に理解したふりをして同意を示す態度を批判している。続いて、33 行目で、SY は再び、研究者がある程度の背景知識を持つのにもかかわらず、自らの意見を押し付けず、相手の経験を聴くことが望ましいと述べている。

例 3 の分析をまとめると、SY と ZB は相互行為を通じて、意見を聞く側としての研究者と、意見や助言を述べる側としての研究協力者の関係を構築している。SY は研究者の前では、自らの経験や知見を積極的に提示し、自己の専門性を主張する姿が見られた。

6.　考察

以上の分析を踏まえ、RQ（1）と RQ（2）に対応した答えを述べる。

まず、RQ（1）：SY はいかにして語りの中で自己を位置づけているのかに対応した考察を述べる。

SY の語りにおいては、語りの文脈や関係性の変化に応じて複数の「自己」が構築されている。たとえば、専門職や病院スタッフの前では、制度的権威に従属する「受動的な障害者としてのピアサポーター」という自己が現れる。一方、病棟での差別的な対応やグループホームでの管理的立場に関する語りからは、「嫌われ者としての部外者」あるいは「支援者としての威厳を保つために障害を隠す健常者的な自己」が浮かび上がる。さらに、研究者との対話においては、「語り手としての権利を持つ研究協力者」、すなわち、自らの経験や知見を積極的に共有し、対話の中で影響力を発揮する能動的な自己が現れる。これらの語りを通して、SY は状況ごとに異なる立場に自己を位置づけており、その過程でアイデンティティが流動的かつ関係性的に構築されていることが確認される。

次に、RQ（2）：SY はいかなる語りによって専門性や権威性を構築しているのかについての考察を述べる。

SY の語りは、彼女が直面する相手の属性や文脈に応じて、専門性や権威性の構築を柔軟に調整していることを示している。専門職や病院スタッフといった制度的権威を有する相手の前では、発言の主導権を握られ、受動的な立場に置かれることが多い。こうした語りには、ピアサポーターが依然として制度的には周縁化された立場にあることが示唆されている。一方で、グループホームでは利用者との関係性の中で「支援者」としての権威性を維持する必要があり、そのために自己の障害を開示せず、あえて健常者的に振る舞う戦略が採られていた。このような関係性の非対称性は、山川・船越（2020）が指摘するよう

に、現場におけるピアサポーターの役割の不安定さを反映している。今回の SY の事例では、グループホームの管理者により、共感をしないという行為をとることによって、非当事者を演じすることにより、すなわち、関係性に応じて自らの権威性を「引き上げる／抑える」必要に迫られる。

さらに、研究者の前では、SY は自身の経験や知見を積極的に提示し、語りの主導権を握る場面が見られた。とりわけ、研究者に対して「知ったかぶりではなく、無知の姿勢で聴くことが話しやすさにつながる」と評価する語りには、当事者が「語る主体」として認識されたいという強い意志が反映されている。

このような語りは、Narrative-Based Medicine（NBM）の立場と共鳴する点がある。NBM においては、医師は単なる「受動的な聴き手」ではなく、患者とともに物語を構築する「証人」としての役割を担うことが求められる（Charon 2011）。同様に、SY の語りにおいても、聞き手が評価や解釈を控え、傾聴することによって、語り手は自己の経験を新たに解釈し直し、再意味化する契機を得ていると考えられる。このような実践は、単なる語りの機会の提供にとどまらず、当事者が自己の経験を「専門性」として提示する実践でもあり、それを通じて職業的尊厳（professional dignity）を確立していくプロセスでもあると考えられる。

7. おわりに

本稿は、周（2024）の知見をもとに、精神障害ピアサポーターという役割の複雑性に注目するものである。ピアサポーターは、当事者であると同時に「支援者」としての専門性や権威性を求められる立場にあり、この二重の位置づけが彼らのアイデンティティ構築に独特の困難をもたらしている。本稿では、SY の語りを分析対象とし、ピアサポーターが誰と関わるか（専門職、グループホームの管理者、研究者など）によって、自身の立ち位置や提示する専門性がどのように変容するのかを明らかにした。SY の語りでは、研究者を前にしてはピアサポーターとしての経験や知見を積極的に提示し、自己の専門性を主張しようとする姿勢が見られた。一方、専門職の前では発言の主導権を握られ、受動的な立場に置かれる場面が多く観察された。さらに、グループホームにおいては、「支援者」としての権威性を保つために、自身の障害を開示せず、健常者として振る舞うことが求められていた。

こうした語りからは、ピアサポーターが状況に応じて関係性を読み取り、自己の立場を調整している様子が浮かび上がる。特に、同じ当事者である利用者に対しては、共感よりもむしろ距離をとることで権威性を保とうとし、制度的に専門性が認められた職種の前では、自身の専門性が軽視されるという構造に直面している。したがって、ピアサポーターの語りに表れる実践知の複雑さや対人スキルを、単なる「経験の共有」ではなく、専門性の一環として正当に評価できる仕組みの整備が今後求められる。

トランスクリプト記号一覧

(n.m)1 秒以上の沈黙	： 直前の音の引き延ばし	(.) 小休止
@ 笑い（個数は長さ）	.h 笑いに伴う発話	… 言い淀み
↑ 直前の音の上昇	[オーバーラップ開始	＝ ラッチング

参考文献

相川章子（2013）『精神障がいピアサポーター』中央法規出版.

岩田祐子（2022）「第 9 章 ディスコース分析」重光由加・村田泰美・岩田祐子（編）『社会言語学 基本からディスコース分析まで』ひつじ書房.

厚生労働省（2021）「令和 3 年度障害福祉サービス等報酬改定について」URL: https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000202214_00007.html（最終アクセス：2025 年 5 月 28 日）

嶋田珠巳・三上剛史（2022）「言語使用とアイデンティティ構成―社会言語学と現代社会論の交差―」『社会言語科学』25 巻 2 号, 9-24.

周氷竹（2024）「日本における精神障害ピアサポーターのアイデンティティ構築 ―インタビュー・ナラティブの談話分析―」『間谷論集』18, 61-79.

竹内葵和子・嶋津多恵子・野尻由香・鈴木茜（2024）「相談支援事業に携わる精神障害をもつピアサポーターが経験する困難とピアサポーターの活動を支える要因」『日本公衆衛生看護学会誌』13 巻 3 号, 186-195.

山川あすか・船越明子（2020）「精神保健福祉分野におけるピアスタッフがピアサポート活動を通して経験する困難」『精神障害とリハビリテーション』24 巻 1 号, 82-89.

Rita Charon（2011）斎藤清二・岸本寛史・宮田靖志・山本和利（共訳）『ナラティブ・メディスン 物語能力が医療を変える』医学書院.

Davies, B., & Harré, R. (1990). Positioning: The discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 20, 43–63.

De Fina, A., & Georgakopoulou, A. (2012). *Analyzing Narrative: Discourse and Sociolinguistic Perspectives*.

Georgakopoulou, A. (2006). *Thinking big with small stories in narrative and identity analysis. Narrative Inquiry,* 16(1), 122–130.

Vandewalle, J., Debyser, B., Beeckman, D., Vandecasteele, T., Van Hecke, A., & Verhaeghe, S. (2016). Peer workers' perceptions and experiences of barriers to implementation of peer worker roles in mental health services: A literature review. *International Journal of Nursing Studies*, 60, 234–250.

Zimmerman, B. J. (1998). Developing self-fulfilling cycles of academic regulation: An analysis of exemplary instructional models. In D. H. Schunk & B. J. Zimmerman (Eds.), *Self-regulated learning: From teaching to self-reflective practice,* 1–19.

---

[i] 本稿は科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業（JPMJFS2125）の助成を受けたものである。

[ii] Zimmerman（1998）はアイデンティティを、「ディスコース上のアイデンティティ（discourse identity）」、「持ち運び可能なアイデンティティ（transportable identity）」と「状況に埋め込まれたアイデンティティ（situated identity）」に分けている。

[iii] 「健常者目線」は、健常者であるがゆえに当事者の立場に立って考えることができないような考え方を意味する。